

学園祭における共創的コミュニティの共愉的關係構築

荷方 邦夫¹

¹ 金沢美術工芸大学

Convivial Collaboration in Co-Creation Activities

Social interaction analysis in project-based design education practice

Kunio Nikata¹

¹ Kanazawa College of Art

1. 研究の背景と目的

本研究は共創的 (Co-creation) 活動とよばれる複数のメンバーによる創造的活動について、活動の中ではメンバー間においてどのような関係が構築されているか、またどのような関係の構築が活動の成否に関わっているかについて検討するものである。

先行研究では活動を通して参加者が動機づけられることによって、活動の活性化が期待される (Hacking, et al., 2008) ことや、創造的なデザイン課題を複数の参加者で解決する時、参加者による対話が解決の質を向上させること (石井・三輪, 2001) などが指摘されている。

さらに岡部 (2021) や荷方 (2024) は、成功した共創的活動においては、メンバー間での「共愉的 (Convivial) な相互作用」の存在を指摘している。共愉的な相互作用がみられるグループのもとでは、グループのメンバーが積極的に活動に関与し、相互のリソースを提供しながら目標達成をしようとする動きが活発に見られる。この働きは共創場面において、高い水準の創造活動を促進することにも共通した側面を持つのではないかと考えられる。

そこで本研究は大学の学園祭における、グループによる創造的な活動を対象として、チーム単位で活動が行われる創造的行為について、グループのコミュニティにおいてどのような活動や相互作用が発生した時に、円滑かつ創発的なパフォーマンスが見られるのか。また、メンバー間での共愉的な相互作用が

見られるかについて検討を行うこととする。

調査対象となった活動は、筆者が勤務する大学の学園祭である。ここでは仮装パレードやアートマーケットが毎年行われており、参加者である学生は自ら仮装パフォーマンスを自ら創出したり、自ら制作した作品を販売したりするものであった。また実行委員などで学園祭自体を企画実施する活動なども共創的活動として調査の対象とした。

2. 方法

調査は 2025 年の学園祭の終了後、参加した学生に任意でアンケートの形式で調査を行った。アンケートの内容は、自らが参加したチームの活動についての自己評価とその理由、参加したチームが共創的に活動していたかの自己評価とその理由、そしてチーム内が共創的であるために重要だと思うことについての自由記述であった。自己評価は 5 件法尺度によって記入し、その理由については自由記述形式の解答欄に書くよう求めた。また、参加者が参加したグループに対してどのような意識を持っているかを検討するため、McMillan & Chavis (1986) が開発したコミュニティ感覚尺度を実施した。アンケートは Google Form を使用して無記名での記述を求めた。調査に参加した学生は 123 名だった。

またアンケートの実施後、デプスインタビューとして参加した学生 5 名に対して、参加した時の活動経験や感想について、半構造化面接の形式で 30 分程

(20210226)

1 度のインタビューを行った。

2 3. 結果と考察

3 3.1 共創的活動についての参加者の評価

4 最初に、アンケートの結果の分析を行った(表1)。
5 5件法尺度による質問1「グループ活動で、あなたの
6 グループはクリエイティブな(創造性の高い、質の良
7 い、努力が実を結んだ)成果を上げることができた
8 と思いますか」、質問2「今回の活動で、あなたのチー
9 ムは良いメンバー関係の中で、クリエイティブに活
10 動することができたと思いますか」による学生の評
11 価は高く、自らの表現活動が質の高いものであった
12 と評価した。

表1 参加者の評価

	質問1	質問2
非常に良く出来た	53	53
やや良く出来た	61	61
どちらでもない	3	3
あまり良く出来なかった	5	5
非常に良く出来なかった	1	1

13 以降、現時点で進行している分析の概要のみを説
14 明する。質問1と2の評価の理由を問う自由記述は
15 テキストマイニングによって共起ネットワークを作
16 成したところ、質問1については準備・協力・分担、
17 助け合う・出し合うといったコミュニケーションに
18 関する語の連関や、作品が売れる、楽しくできること
19 など活動の質に関する語が確認できた。また反対に
20 負担が大変、不満が出るなどの軋轢に対する対処に
21 関する言及も多く見られた。質問2については意見
22 を出すこと、任せる・明るいといった語が楽しいと関
23 連していること、励まし、尊重、お菓子の差し入れな
24 ど、ポジティブな働きかけが確認された。またこれら
25 の自由記述について言及された内容の分類を行うこ
26 とにしている。

27 またコミュニティ感覚尺度については表2のよう
28 に、もとの4つの因子の内部構造が確認できなかつ
29 たため、新たに因子を抽出した(負荷量0.4以下、複
30 数因子にかかるものを除去)。またそれぞれの因子得
31 点と質問1と2の評価間での相関も高くはなく、グ
32 ループのメンバー間におけるコミュニティとしての
33 意識の高さが成功したクリエイションに寄与するわ
34 けではないことが示唆された。

35 分析ではこれらの結果と併せて、参加した学生に
36 対するデプスインタビューを行っており、メンバー
37 間での人間関係の調整、ポジティブな相互評価によ

表2 コミュニティ感覚尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4
ニーズの強化1			0.594	
ニーズの強化2	0.431			
ニーズの強化3	0.498			
ニーズの強化4	0.782			
ニーズの強化5	0.612			
ニーズの強化6	0.554			
メンバーシップ1	0.891			
メンバーシップ2				0.797
メンバーシップ3				0.970
メンバーシップ5			0.615	
メンバーシップ6		0.659		
影響力1		0.614		
影響力3		0.467		
影響力4			0.543	
影響力5	0.675			
情緒的結合1		0.765		
情緒的結合5	0.460			
情緒的結合6	0.566			

38 るグループ間の維持のほか、2年生以上は「自ら選び
39 取った関係」の上でグループを構築し、普段の制作の
40 中などから、それぞれの良さや能力などへの敬意が
41 あって、それが活動全体のドライブとなっているこ
42 となどが分かっている。これらの分析をさらに深め
43 ながら分析を進めるものとする。

44 文献

45 Hacking, S., Secker, J., Spandler, H., Kent, L. and Shenton, J.
46 (2008). Evaluating the Impact of Participatory Art Projects
47 for People with Mental Health Needs, *Health and Social*
48 *Care in the Community*, 16(6), 638-48.
49 <https://doi.org/10.1111/j.1365-2524.2008.00789.x>
50 石井 成郎・三輪 和久(2001). 創造的問題解決における協調
51 認知プロセス. 認知科学, 8(2),151 - 168.
52 <https://doi.org/10.11225/jcss.8.151>
53 荷方邦夫 海保博之(1998) 問題解決支援における制約が
54 もたらす知識の道具性 筑波大学心理学研究 20,69-
55 75.
56 岡部大介, (2021) ファンカルチャーのデザイン 彼女は
57 はいかに学び, 創り, 「推す」のか, 共立出版.
58
59

1